2009年度・研究旅行奨励制度　【個人旅行】

名　前	古賀菜見子	研究テーマ	カンボジアの貧困層における自立支援と教育 －NGO・NPOの活動から見る国際協力－
目的地	国　名	地域・都市名	
	カンボジア	プノンペン	

研究旅行の目的
①　カンボジアの貧困層（または地域）の現状を把握し、課題を明確化すること。 ②　NGO・NPOが運営する孤児院や学校などの役割を理解すること。 上の二つを研究の柱とし、目的を達成するために以下の四つの活動を行う。 １、NGO・NPOが運営する孤児院や学校等の見学、情報収集 　実際に、その場所を訪れることで写真や映像ではわからない苦労や生活環境を体感する。また、最 　新の情報や資料を入手する。 ２、現地駐在スタッフとの対談 　カンボジアに駐在している人にしか聞けない体験談などを踏まえたインタビューをする予定。 ３、礎の石孤児院でのボランティア 　実際に自分がその仕事を体験することによって孤児院での生活をより理解できる。また、子どもた 　ちとより多くの時間を共有し、親睦を深める。 ４、現地の人との交流 　カンボジアの生活環境や習慣を理解するためのきっかけをつくる。
期待される成果
１、見学・対談を通しての情報、資料収集 ２、カンボジアの現状の把握、課題の明確化 ３、日本の NGO・NPO が果たす役割の理解（先進国と発展途上国の関係、支援の方法など） ４、国際協力・ボランティアの意義の理解 ５、異文化理解、日本文化理解 　多文化に触れることによって、カンボジアと日本の文化と比べ客観的にとらえることができるよう

になる。
6、日本での活動を通しての社会的貢献
体験を話す・ボランティア活動に取り組むなど自分が発信源となり、カンボジアの生活環境改善を
促していく。

旅行期間：2009年8月18日（火）～2009年9月1日（火）　15日間

	活 動 内 容
1日目	移動…福岡→バンコク経由→カンボジア（プノンペン）
2日目	・王立プノンペン大学、Cambodia-Japan Cooperation Center （カンボジア日本人材開発センター）訪問、情報収集 ・フリースクール愛センター訪問、授業風景の見学
3日目	・フリースクール愛センター訪問、日本語の授業を担当
4日目	・Cambodia International NGO School の授業に参加
5日目	・Cambodia International NGO School 校長の下田氏と対談
6日目	・プノンペン観光、情報収集
7日目	・JICA カンボジア事務所訪問、JICA 職員の方と対談 ・フリースクール愛センター訪問、情報収集
8日目	・NGO「MAKE THE HEAVEN」のスタディーツアーに参加 （バサックスラム、NCCLA 孤児院訪問など）
9日目	・礎の石孤児院訪問、見学、スタッフの方にインタビュー
10日目	・礎の石孤児院訪問、日本語の授業を見学
11日目	・NPO Asian Monkey 代表 上田氏と対談
12日目	・NGO School の生徒と料理を行い、お世話になった方を招き会食。 ※現地で日本食の材料調達が困難だったため、メニューはハンバーグとナポリタン。
13日目	・フリースクール愛センターで日本語の授業
14日目	・学生団体レアスマイル（津田塾大学）の現地活動に同行 ・NCCLA 孤児院訪問 ・移動…カンボジア（プノンペン）→バンコク経由→福岡
15日目	・帰国（午前）

補足説明
ご承知のとおり、カンボジアという国は内戦によって不安定な政治体制がつづき今では

世界で最も貧しい国の一つと言われている。1991 年に和平条約が締結されてからは、徐々に安定してきており、その改善は統計的にも評価されている。（アメリカの平和基金会が作成した失敗国ランキングでは、かつて 33 位だったが、2008 年には 48 位になった。）

しかし、国家財政を自国でまかなうのは難しく、今も多くを海外からの支援に頼っている状態だ。日本も ODA 等を通して多額の援助をしているが、政府間のやりとりでは本当にそのお金を必要としている人、特に貧困層の人間には届きにくい。たとえば、カンボジアの教師（公務員）の給料は月にたった 30 ドルである。子どもの教育を担う教師でさえこの値段なのだ。貧困層に届くお金はごくわずかだということが予想できるだろう。

そのような、貧困層の支援をしているのは民間の NGO・NPO である。国と国とでは届かなくても、人と人との交流ではその場所に何が不足していて、どういう支援が必要なのかが明確に分かるとともに、それを確実に届けることができる。この点で民間の NGO・NPO は多大な役割を担っているといえる。

このような背景をふまえ、今回は「カンボジアにおける貧困層の自立支援と教育」というテーマにそって、以下の日本の NGO・NPO が支援する孤児院や学校を訪問したいと考えている。これらの施設を訪問し、見学また、活動に参加することはカンボジアの現状を知るために大きな意味を持つ。

１、礎の石孤児院：2009 年１月現在、この孤児院では日本人スタッフのほかにカンボジア人のヘルパーが８人おり、34 名（内 HIV 感染者４名）の孤児が生活している。
※http://www5.ocn.ne.jp/~ishizue/

２、NCCLA 孤児院：カンボジア人が運営する孤児院。孤児数 25 人。プノンペンのイタリアンレスト
ランで週二回カンボジア伝統芸能アプサラダンスを披露する。
※http://maketheheaven.com/cambodia/　（仲介団体）

３、非営利団体 ASIAN MONKEY：プノンペン郊外にあるゴミ山で生活する人々を支援している団体。
アクセサリーなどのフェアトレードを行っている。
※http://theasianmonkey.amhp.jp/

４、フリースクール愛のセンター：ゴミ山付近あるフリースクール。学校に通えない子どもたちに教育
の場を提供している。
※http://cambodia.nobody.jp/

５、インターナショナルカンボジア NGO スクール：プノンペン市内にあり、定価で英語、日本語、韓
国語、コンピューターなどを教えている。
※http://www.cambodia.npo-jp.net/index/html

６、JICA カンボジア事務所
※http://www.jica.go.jp/cambodia/

【報告書・要旨】

カンボジアは長い間内戦が続き、国土が荒廃し様々なシステムが崩壊した。特に 1975 年からの三年間続いたポルポト政権下では、教師や医師などの知識人をはじめ、人口の三分の一が虐殺された。それゆえ、現在カンボジアの人口の約 45%が 20 歳以下となっており、教師や学校の不足が大きな問題となっている。実際カンボジアの学校は、2 部制や 3 部制で 1 日の勉強時間は 3～4 時間程度であり、教育省のカリキュラムにある 1 日 5 時間で 1 週間に 27～30 時間というものは実施できていないのが現状である。

この絶対的に足りない勉強時間を補っているのが、プノンペン市内に多く見られるフリースクールである。これらの教育機関では無償、または低価な授業料でクメール語、英語、日本語などの授業を行っており、その運営には NGO や NPO、学生団体などが携わっている。また、貧困層や孤児・ストリートチルドレンの保護や自立支援（職業訓練）などを行っている団体も数多く存在し、カンボジアの復興・発展に不可欠な存在である。

そこで今回の研究旅行では、これらの団体が運営する学校や孤児院への訪問、またスタッフや子どもたちとの交流に重点を置いた。実際には、フリースクール二つ、孤児院二つを含む八つの団体とコンタクトを取った。この活動は、カンボジアにおける生活や教育の実態を明らかにするため、そして、国際協力の意義を理解するためにとても有効であったと考えている。

【報告書】

カンボジアの貧困層における自立支援と教育
－NGO・NPO の活動から見る国際協力－
古賀菜見子

≪はじめに≫

カンボジアは、インドシナ半島の中央部に位置する王国であり、東西を地域大国であるタイ及びベトナムに挟まれている。1954 年にフランスから独立し国づくりを進めてきたが、1970 年から 1991 年にかけて内戦による混乱に見舞われた。特にクメール・ルージュが支配した時代（1975 年～1979 年）には、医師や教師などの知識人をはじめ、約 170 万人（全

人口の約３分の１）もの国民が亡くなっている。この自国民虐殺と長い間続いた内戦の結果、カンボジアは、国づくりの基盤である人材と制度、及び経済的・社会的インフラが完全に崩壊してしまった。

しかし、1991 年の和平条約締結後は比較的安定した政治情勢であり、近年では３年連続で経済成長率が 10%を超えるなど、着実に復興・開発への道を歩んでいる。しかし、国家財政を自国で賄うのはまだ難しい状況で、今も多くを海外からの援助に頼っている。2006 年のデータによると、カンボジア政府が受けている援助総額は 594.8 百万ドルで、これはカンボジアの国家歳入の 63.9%に当たる。日本も昨年までトップドナーであり多額の援助をしてきた。しかし、政府間のやり取りでは個人に直接お金や物資が渡ることは少なく、特に貧困層には届きにくい。実際、カンボジアでは一日一ドル以下で暮らす人（絶対的貧困層）が人口の 31%（2006 年）を占め、貧富の差が拡大している。

このような状況の中、貧困層の人々に支援をしているのは民間の NGO・NPO 団体である。国と国では届かなくても、人と人との交流ではその場所に何が不足していて、どういった支援が必要かが明確に分かるとともに、それを確実に届けることができる。この点で、民間の NGO・NPO 団体は多大な役割を担っているといえる。

このような背景をふまえ、今回は**「カンボジアにおける貧困層の自立支援と教育～NGO・NPO の活動から見る国際協力～」**というテーマのもと、日本の民間団体、及び個人が支援する施設を訪問し、情報収集。調査を行った。目的は次の二点である。

（１）カンボジアの貧困層（または地域）の現状を把握し、課題を明確化すること。

（２）NGO・NPO が運営する孤児院や学校を訪問し情報収集、及びこれらが果たす役割について理解すること。

カンボジアは人材不足に悩む国である。そこで、次世代を担う子どもたちの教育や自立支援に重点を置き、以下の施設で調査を行った。

＜研究のため訪問、及び活動に参加した施設＞

１、Cambodia International NGO School

２、スリースクール愛センター

３、礎の石孤児院

４、NCCLA 孤児院

５、JICA カンボジア事務所

１、カンボジア概要

１．１、基本データ

正式名称	カンボジア王国（Kingdom Of Cambodia）
面積	18.1 万平方キロメートル（日本の約 2 分の 1 弱）
人口	13.4 百万人（2008 年政府統計）

首都	プノンペン
民族	カンボジア人（クメール人）が 90%
言語	カンボジア語（クメール語）
宗教	仏教（一部少数民族はイスラム教）

１．２、政治体制・内政

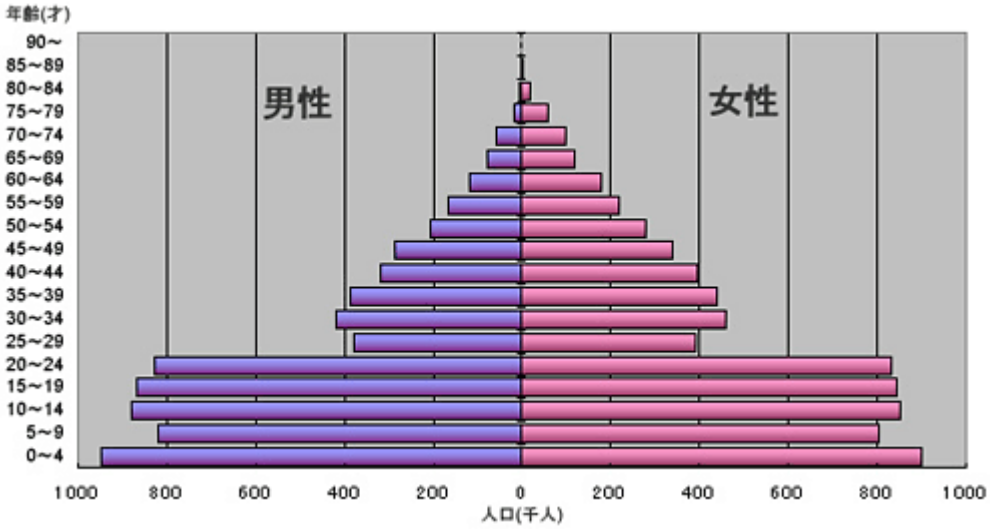
政体	立憲君主制
元首	ノロドム・シハモニ国王（2004 年 10 月即位）
国会	二院制
政府	人民党（第一党）とフンシンペック党（第四党）による連立政権 （首相：フン・セン）

１．３、経済

主要産業	観光・サービス（GDP の 41.8%）、農業（GDP の 34.4%） 鉱工業（GDP の 23.8%）　　（2008 年、カンボジア政府資料）
GDP	約 110.2 億米ドル（2008 年、同上資料）
一人当たり GDP	710 米ドル（2008 年、同上資料）
物価上昇率	20.0%（2008 年、IMF 資料）
失業率	不明
貿易総額	（1）輸出　43.6 億米ドル （2）輸入　65.2 億米ドル
主要貿易品目	（1）輸出　縫製品、生地、天然ゴム・ゴム製品 （2）輸入　生地類、石油製品、家電製品、車輌部品
通貨・為替レート	リエル(1 米ドル＝約 4,057 リエル、2008 年平均) （カンボジア政府資料）

２、カンボジアにおける人材不足

先述したとおり、カンボジアの人材不足は深刻なものである。下のグラフは、2004 年におけるカンボジアの人口ピラミッドである。このグラフから次の三点を読み取ることができる。



出典：世界人口白書 2004 年版（UNFPA）

（1） ポル・ポト政権下の急激な出生率の低下

ポル・ポト政権下、すなわち 1975 年～79 年にかけて生まれた人、つまり、2009 年時点で 34 歳～30 歳までの人口が極端に少ない。

（2） ポル・ポト政権以前に生まれた人口の少なさ

ポル・ポト政権下では男性が 117 万人、女性が 61 万人、総計 176 万人が虐殺されたと言われている。このため、男女の人口比がポル・ポト政権崩壊直後の 1980 年には、86.1 まで低下した。しかし、2008 年の調査で性比が 94.2 まで回復していることが分かっている。

（3）内戦終了後（1991 年～）の人口増加

2008 年 3 月 3 日現在におけるカンボジア全国の人口は、1340 万人で、10 年前の 1998 年と比較して、196 万人増、1 年間に換算すると 1.54%増となっている。また、世界子供白書によると、カンボジアの合計特殊出生率は、2000 年：4.0、2005 年：3.7、2007 年：3.3 と高い数値にあり、今後も人口の増加が予想される。

カンボジアの全人口のうち 18 歳未満の子ども（内戦終了後に生まれた子ども）が占める割合は 44%、つまり、人口の半数近くが子どもなのだ。また内戦時に亡くなった人々に加え、ポル・ポト政権下では教師や医師などのインテリに対する虐殺があったため、本来ビジネス界、政界、あるいは教育、司法の世界で重要な役割を担っていたであろう人々を多く失ったことが国の発展の障害になっていると言える。

３、カンボジアの教育事情

ポル・ポト政権下にあったわずか 3 年の間に、70 年余り続いたカンボジアの教育システムは崩壊してしまった。1979 年にベトナムの後押しでヘン・サムリン政権が発足し、教育の復興が始まった。それが現在のカンボジアの教育の基盤となっている。しかしながらカンボジアの教育制度は教師不足、教材不足など様々な問題をかかえている。

カンボジアの教育制度は日本と同じ教育制度であり、6・3・3 制である。初等教育は小学校の 6 年間であり、小学校には 6～8 歳の子どもが入学し、1996 年より義務教育となっている。表 1 と表 2 はカンボジアの教育省によって定められた初等教育のカリキュラムである。

科目	授業数
クメール語	13
算数	7
理科・社会（芸術）	3
保健体育	2
ＬＬＳＰ	2～5
合計	27～30

表 1　Grades1-3

科目	授業数	
	Grade4	Grades5-6
クメール語	10	8
算数	6	6
理科	3	4
社会（芸術）	4	5
保健体育	2	2
ＬＬＳＰ	2～5	2～5
合計	27～30	27～30

表 2　Grades4-6

表 1、2 のようにカリキュラムは定められ、教育の目的も全ての子どもに読み・書き・計算の基礎を保証し、健康や道徳教育、生活能力を発育させることが教育省によって述べられている。しかしながら実際は、プノンペンも地方も校舎の不足・教師の不足などの理由から学校は 2 部制や 3 部制で 1 日の勉強時間は 3～4 時間程度であり、教育省のカリキュラムにある 1 日 5 時間で 1 週間に 27～30 時間というものは実施できていない。

４、民間団体による教育支援

今回調査を行った首都プノンペンには、英語や中国語、タイ語、日本語などを扱う語学学校が多く存在する。公立の学校は午前・午後のどちらかしか授業がないため、子どもたちは空いた時間を利用してこのような教育機関で語学などを学んでいる。これらは、子どもたちに教育の場を提供するとともに、国際化する社会に対応できる優秀な人材の育成にも役立っている。今回は日本の NGO、または個人が支援する学校・フリースクール二ヶ所で授業への参加、及び現地スタッフとの対談をした。

４．1、Cambodia International NGO School

◇授業時間割◇

Room1	Room2	Room3	Room4	Room5	Room6	Room7	Room8	Room9	Room10
ホーウ(E)	コンピュータ・クラス	Free	シナット(E)	ブンティア(J)	Free	ブンティア(K)	コンピュータ・クラス	ボレイ(J)	チャムラウン(E)
リナ(E)		Free	ホーウ(E)	ブンティア(K)	サヴォン(E)	メイン(Ch)		ボレイ(J)	サラット(E)
サヴォン(E)		Free	リナ(E)	Free	ホーウ(E)	サラッタ(E)		メイン(Ch)	ボレイ(J)
ホーウ(E)		Free	リナ(E)	Free	Free	Free		メイン(Ch)	Free
Free		Free	Free	Free	Free	Free		Free	Free
ホーウ(E)		Free	チャムラウン(E)	ヴィボル(Th)	Free	Free		Free	Free
ホーウ(E)		Free	Free	ヴィボル(Th)	Free	Free		Free	Free
リナ(E)		Free	ホーウ(E)	メイン(Ch)	サヴォン(E)	Free		パニット(E)	Free
リナ(E)		Free	ホーウ(E)	メイン(Ch)	サヴォン(E)	ヴィボル(Th)		パニット(E)	ボレイ(J)
ホーウ(E)		Free	Free	ヴィラック(E)	サヴォン(E)	メイン(Ch)		パニット(E)	ボレイ(J)
サヴォン(E)		Free	ヴィラック(E)	シナット(E)	リナ(E)	メイン(Ch)		チャムラウン(E)	ボレイ(J)
サヴォン(E)		日本語上級	メイン(ch)	ブンティア(K)	リナ(E)	ダヴィ(E)		ボレイ(J)	ヴァンナリ(K)
サヴォン(E)		Free	サムレッチ(E)	サヴィー(E)	リナ(E)	ブンティア(K)		チャンター(J)	ヴィラック(E)

※E：英語　Ch：中国語　J：日本語　Th：タイ語　K：韓国語

Free の時間には日本人ボランティアが企画した授業などを行っている。

・授業料　　１コマ 500 リエル（13 円くらい）
・駐車代　　バイク 300 リエル、自転車 200 リエル
・スタッフ　　役員 13 名、有給専従スタッフ 40 人（すべてカンボジア人）
・生徒数　　約 2000 人／日

・対象　　指定はないが大学生が多い
（内訳：社会人５％、大学生 80%、中高生 15%、小学生１％以下）
・場所　　プノンペン市内（王立プノンペン大学の近く）
・経営者　　特定非営利団体カンボジア NGO
（今後、カンボジア人のみで運営していく予定）

・運営資金　　授業料、会費、理事や個人からの寄付金

Cambodia International NGO School （以下 NGO 学校）では、１コマ（１時間）単位で生徒から授業料を徴収している。これは、無料だからとりあえず受けてみるという考えをなくし、お金を払って授業を受けているという実感をもって参加してもらうため、そしてカンボジア人のみによる自立運営を目指すためでもある。しかしながら、プノンペンで１コマ 500 リエルという授業料はかなり良心的で、その噂が農村地区などの田舎に伝わり地方からも多くの学生が訪れている。なお、授業料の 500 リエルのうち、300 リエルが学校運営費に、200 リエルがその授業を行ったスタッフの給料に充てられている。

生徒たちに一番人気の授業は英語で、授業のコマ数も生徒の数も他の授業に比べると格段に多い。次にコンピューターの授業が人気である。NGO 学校にはコンピューターが 80 台ほどあり、基本操作から応用技術まで学べるようになっている。日本語の授業は、現在生徒数が減っている。日本人の長期ボランティアが途切れ、上級クラスがないことが影響しているようだ。

NGO 学校の授業風景

４．2、フリースクール愛センター

◇授業時間割◇

08：00～10：00　　クメール語、英語など

11：00～12：00　　日本語

14：00～16：00　　クメール語、英語
17：30～16：30　　日本語、英語
18：30～19：30　　日本語、英語

・授業料　　無料
・スタッフ　　７人（有給）
・生徒数　　約 130 人／日
・対象　　指定はないが小学生～高校生が多い
・場所　　ステンメンチャイ地区
・経営者　　個人経営（代表：渡辺 藍 ― ミエンチェイ大学日本語講師）
・運営資金　　渡辺さんの個人出資、寄付など

フリースクール愛センター（以下、愛センター）では、無料で授業が受けることができる。愛センターがあるステンメンチャイ地区には、少し前までプノンペン中のゴミが集まる“ゴミ山”と呼ばれる場所があった。そのゴミを求めて貧困層の人が集まり、学校に行けない子どもも多かった。そんな子どもたちに何とか教育の場を提供したい、という代表の渡辺さんの強い思いからが始まったのが愛センターである。

しかし、今回の調査では貧困層と呼ばれる子どもの授業参加は見られなかった。その理由として、2009 年４月にプノンペンのゴミ集積所が移転し、ゴミ拾いをして生計を立てていた人が新しい土地に移った、または田舎に帰ったことが考えられる。

愛センターでは、外国語だけでなくクメール語も教えている。クメール語の授業では社会・算数・道徳の内容も取り入れている。午前の授業は小中学生が多く、遅い時間になるにつれて高校生などが増え年齢層も高くなる。

スタッフは有給であるが、他に本職がある人や大学生が多くほとんどボランティアに近いようだ。授業はやはり英語が人気であった。また、早い時期から外国語を耳にしているからか、英語も日本語も修学年数から考えるよりはるかに堪能な子が多かった。

愛センターでの授業風景

写真がたくさん飾られている

５、カンボジアの孤児事情

カンボジアでいう“孤児”とは両親を亡くした子どもたち、捨てられた子どもたちのみならず、片親のみの家庭で経済的に貧しい、親が暴力を振るう、養育を完全に放棄したなどの状況の中で親族も養育を拒否している子どもたちを指す。UNCEF の資料（2005 年）によると、カンボジアの人口約 1400 万人のうち推定 47 万人の孤児がいるという。つまり、総人口の約３％が孤児なのだ。カンボジアに孤児が多い主な理由としては、以下の三点がある。

（１）HIV／AIDS で親を亡くす

カンボジアには推定 21 万人の感染者がいるといわれており、感染率は 18～45 歳の成人の約５％を占める。

（２）出生時に親を亡くす

カンボジアでは、まだ医療機関が充実してないので伝統的産婆が出産に携わるケースがほとんどだ。しかし、大半の伝統的産婆は基本的な研修を受けておらず、複雑な出産には危険が伴う。（妊産婦死亡率は出生 10 万件あたり 473 人であり、日本の約 47 倍である。）

（３）その他

経済的理由、病気・けが（伝染病や地雷被害など）、暴力など

カンボジアでは、生活水準の低さから児童労働を余儀なくされる子どもたちが、５歳から 14 歳の 45%を占めるといわれている。プノンペンだけでもストリートチルドレンが 14 万人いるといわれており、孤児の学校出席率は 80%と低い。子どもたちが将来自立するためには、きちんとした形で教育を受け、知識や生活技術を習得することが不可欠である。この意味で、孤児院は子どもたちの安全を守るとともに、教育の機会を与えるという重要

な役割を担っているといえる。子どもたちにとって、孤児院は“家”であり“家族”なのだ。

６．民間団体による孤児支援

カンボジアには、様々な理由から孤児になった子どもがたくさんいる。この孤児たちを保護し、彼らの権利を守る役割を果たしているのが孤児院である。今回は、プノンペン市内にある孤児院を二ヶ所訪問し、施設内の見学、子どもたちとの交流、運営者及び現地スタッフの方と対談をした。

６．１、礎の石孤児院

・孤児の受入数　34 人（HIV 感染児４人、障害児２人を含む）
・孤児の年齢　推定３歳～17 歳
・場所　プノンペン中心地からバイクで 15 分程度
・スタッフ　日本人１名、カンボジア人８名
・運営者　特定非営利法人礎の石孤児院
・運営資金　寄付金

この孤児院では、日本人駐在員の前田さんに孤児院での生活や子どもたちのようすについて詳しく聞くことができた。子どもたちがこの孤児院に預けられた理由は様々で、父親がアルコール中毒で暴力を受けていた子、市場で物乞いをしていた子、両親を HIV で亡くし自分も感染している子、中には親の顔や、自分の名前すら分からずここに来た子もいる。しかし、身元が分かっている子どもを預かる場合は、どんなに遠くても必ず保護者のもとに出向き、何度も話し合いを重ねて決めるそうだ。

元々学校に行っていなかった子が多いので、勉強で遅れているとこは孤児院内で補講を受ける。国語・数学（算数）・社会・理科の授業があり、週に一度日本語の授業も行われている。子どもたちはミッション系の学校に通っている。公立の学校は無償とされているが、教師の給料が低い（月給 30＄程度）ためカリキュラムに沿った授業が行われなかったり、新品の教材をほかの生徒に取られてしまったりと問題が起きやすい。そのため、少し授業料は高いが質の高い学校を選んでいるそうだ。

前田さんは、出来ることは極力子どもたち自身にさせるようにしている。掃除や洗濯などは当番制で分担し、小さい子の面倒は大きい子がみるなど、カンボジアの一般的な家庭で行われていることが孤児院内でも同様に行われていた。これは孤児たちの自立につながるだけでなく、こうした体験の中で子どもたちは家族の在り方やルールを学んでいく。

食事の様子

掃除中の子ども

６．２、NCCLA(New Cambodia Children Life Association）孤児院

・孤児の受入数　27 人
・孤児の年齢　推定 2 歳～16 歳
・場所　プノンペン中心地
・スタッフ　専従スタッフはいない
・運営者　個人（カンボジア人の夫婦）
・運営資金　夫婦が運営するレストランの売上、寄付金

この孤児院は、カンボジア人の夫婦ネスさんとタヴィさんが始めた。ネスさんはポル・ポト時代に医者であった父親をはじめ、家族の多くを亡くしている。残ったのは母親、祖母、ネスさんの三人だけ。一家の大黒柱を失った上に、母親が病弱だったためネスさんは幼い頃から物売りやゴミを拾いして家計を助けていた。そんな生活の中、わずかな時間を見つけては勉強に励み、高校卒業後は堪能な英語力を活かし通訳や英語教師として働く。そうして稼いだお金でベイヨ・トンレ レストランを開き夢だったレストラン経営を始める。この当時、カンボジアは内戦終了直後で孤児がとても多かった。そうした子どもたちに自分の過去を重ねたネスさんは、一人でもそんな子ども減らしたいという思いで孤児院を作ることを決意する。

最初七人で始めた孤児院だったが、徐々に数を増やし今では 27 人の子どもたちが元気に生活する。ストリートチルドレンだった子、ナイトクラブで働いていた子、生後一週間で捨てられた子など、子どもたちがここに来た経緯は様々だ。

子どもたちはネスさんの方針で学校に通う傍ら、英語や日本語、パソコンの勉強、そしてカンボジアの伝統舞踊であるアプサラダンスの練習をしている。ポル・ポト政権下では伝統舞踊の踊り子や先生の 90%が虐殺され、振付が記録された書物もこのときほとんどが焼失した。だが、アプサラダンスは難を逃れたわずかな踊り手によって息を吹き返した。1989 年から伝統舞踊の復活を目的に、子どもたちを中心とした舞踊教室が始まったのだ。

この伝統芸能を学ぶことで、子どもたちは同時にカンボジアの古典や歴史、音楽、文化なども学ぶことができる。

NCCLA 孤児院の子どもたちは、週に２回、月曜と土曜の夜にネスさんの経営するレストランで踊りを披露している。この孤児院はネスさんのレストランの収益金と、子どもたちの踊りを見たお客さんからの寄付金で成り立っているのだ。こうした活動は、脈々と受け継がれてきたクメール文化を後世に伝えるため、そして何より子どもたちが孤児院を出て一人で生きていくときに、この芸能を生活技術として活用できるという点で非常に意義がある。

子どもたちによるアプサラダンス

子どもたちによるココナッツダンス

※NCCLA 孤児院の訪問に当たっては、この孤児院を支援している NGO「MAKE THE HEAVEN」のスタディーツアーに参加させてもらった。MAKE THE HEAVEN は NCCLA 孤児院の子どもたちを日本に招待し、アプサラダンスの日本公演を企画したり、スラムの支援、学校建設などの活動を行っている。

7. カンボジアにおける JICA の取組み

今回の研究旅行では、民間団体、及び個人が支援する施設を中心に調査、及び情報収集を行ったが、より課題を明確化するため政府組織である JICA 事務所を訪問し、JICA が進める事業、及び JICA の果たす役割について JICA カンボジア事務所職員の小川紀子さんに話を聞いた。

７．１、JICA が進める事業について

≪協力の基本的な考え方≫

JICA は、日本政府開発援助（ODA）大綱、ODA 中期政策及び対カンボジア［国別援助

計画］を念頭に置き、カンボジア政府の戦略及び国内の状況を十分考慮した上で、「人材育成。制度整備・インフラ整備を通じ、経済成長と貧困削減の両立への協力により、人間の安全保障の実現を図る」ことを対カンボジアの協力方針としている。

≪重点分野≫

１、グットガバナンスの推進

→基本法整備、行政能力向上、政府統計機能強化、地雷除去支援、治安対策支援など

２、経済、産業復興

→運輸交通システム改善、発電・送電・配電システムの改善、民間セクター復興など

３、農業・農村開発

→潅漑農業、営農改善、農産物流通改善、辺境地域振興、水産資源の利用と保全など

４、社会セクター開発

→教育の質とアクセスの向上、理数科教育改善、MDGs 課題対策、保健医療サービス強化、障害者を含む社会的弱者の自立支援など

５、共通重要事項

→援助協力

≪事業別協力実績≫

カンボジア

技術協力

	技術協力経費（億円）	形態別												技術協力プロジェクト（件数）	開発調査（件数）
			研修員		専門家		調査団		協力隊		その他ボランティア		資機材供与（百万円）		
			新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続			
2007年度	37.84	人数	437	43	249	61	179	1	25	35	9	29	233.40	7	1
		経費（千円）	398,317		1,099,510		538,902		264,657		167,677				
累計	470.74	人数	8,607		1,814		3,129		270		105		4,071.75		
		経費（千円）	6,701,096		15,561,410		14,172,487		2,757,754		1,472,961				

有償資金協力（億円）

	件数	金額
2007年度	2	47
累計	9	204

無償資金協力（百万ドル）

2007年度実績金額
62.35

JICA は実に幅広い分野で協力を行っている。JICA 職員の小川さんの話によると、JICA ではまずカンボジアの中枢機関や法律、制度の整備を進め、しっかりとした基盤をつくることを目標にしているという。なぜなら、中心組織が整ってない状態で援助を受けてもそれを十分に活かせず、混乱を招いたりわいろの発生につながったりするからである。そこで、グットガバナンスの推進に力を入れ、良い政府・統治・行政の確立、優れた人材の育成に力を入れている。

カンボジアは、第二次産業や第三次産業がめざましく発展しており経済成長率は三年連

続で二桁を記録した。バイクの所有数は４人に１人という高い割合である。また、携帯電話を持つ人は 1000 人のうち 75 人で、カンボジアは固定電話よりも携帯電話の数が多くなった最初の国である。カンボジアでは、農業が主産業で約七割の人が農場業に従事していたので、一人あたりの GDP 値も低く（ASEAN の中で下から二番目）、政府はまとまった税金が取れず財政難に陥っていた。しかし、今後は産業の発展に伴い徐々に財政も豊かになっていくことが予想される。ただ、貧富の差が拡大しているという事実があるので、格差を解消しつつ国民全体の所得の底上げを図る必要がある。

また、JICA は NGO と連携して草の根技術開発事業も行っている。この理由は、援助を効果的に進めるにあたって、案件の形成、実施、実施状況の把握等において当該地域で豊かな経験を有する NGO との連携を強化していくことが有効であるからだ。この事業には、パートナー型と地域提案型があり、前者はシャンティボランティア協会（SVA）と連携して行っている“カンボジア国小学校での図書館活動普及のための人材育成授業”、後者は広島県と連携して行った、“カンボジア国における小学校教員授業能力向上事業”などがある。

≪おわりに≫

今回の研究旅行では、「カンボジアの貧困層における自立支援と教育～NGO・NPO の活動から見る国際協力～」というテーマのもと調査を行った。

まず、学校及びフリースクールについてだが今回訪問した二校では、貧困層というべき子どもは確認できなかった。しかし、授業時間が不足しているカンボジアにおいてこのような教育機関は、不足する勉強時間を補うため、子どもたちの可能性を広げるために多大な役割を担っている。孤児院は、子どもたちに安全で健康的な生活を提供するだけでなく、子どもの権利を守り、教育やその他の技能を学ぶ機会を与えるなど様々な役割を果たしていた。しかし、カンボジアの孤児問題は深刻で孤児院の数も全く足りていない。また、今回の研究を通して、孤児問題は児童労働、人身売買、HIV／AIDS などの問題とも密接に関係していることが分かった。そういった危険から子どもたちを守り、彼らが自立できるようサポートしていくことが孤児院の課題である。

今回の調査で、現地において、私たちが日本国内で思うほど以上に、民間人が行う草の根レベルの活動に柔軟性と即効性が認められていることが分かった。日本はカンボジアの主導的援助国である。そして、カンボジアの復興に大きな役割を果たしている。しかし、ある一面においては、日本の援助のほとんどがインフラ整備、ハード重視の大規模プロジェクトであり、教育、環境、女性などのソフト面への援助が相対的に少ないといえる。もちろん、グットガバナンスの推進やインフラ整備も国づくりの一環として必要不可欠である。ただ、今後の重要なポイントとして、より適切な援助政策がとられるよう日本政府、国際機関、民間団体は、チェック・アンド・バランスのもと密接なパートナーシップを強化していくことが必要とされるだろう。 そして、よりきめ細かい援助、及び地域社会に根付いた援助の実施を目指し、ひとつひとつ課題をクリアしていくべきである。

まだまだ多くの課題をかかえるカンボジアであるが、カンボジアは出来たばかりの新しい国であり、若いパワーにあふれている。今は人材不足が発展の障害になっているが、10年後、20 年後、若い力がこの国を引っ張っていき、活力ある国に成長するだろう。そのためには、やはり政府組織のみならず NGO／NPO などの民間団体、そして個人の支援が不可欠であるといえる。

最後になりましたが、今回このような機会を与えてくださった国際文化学部の先生方、職員の方、その他関係者の方々、そしてカンボジアで出会ったすべての人にこの場をかりて感謝の言葉を述べたいと思います。本当にありがとうございました。この体験を活かし今後もカンボジア、そして開発途上国に何かしらの形で関わっていきたいと思います。